



48

麻生区  
文化協  
会報

あつ  
絵と文・山口昌子

## 白山神社

新百合ヶ丘の賑やかな喧噪から離れ、バスで約五分。新百合ヶ丘グリーントウンの片隅に、ひっそりとたたずみ白山神社はある。記録によると、歴史も古く、江戸時代初期には、すでにこの神社はあったそうだ。嘉永四年（一八五一年）に再建された社殿に納められている本殿は、現在、川崎市重要歴史記念物にも指定されている。

一つ目の大きな石造りの鳥居をくぐると、コマ犬君たちと、二つ目の赤い鳥居が迎えてくれる。階段を一步一歩上がっていくのだが、狭い。十三段目まで上がると灯籠があった。見上げると急な勾配に、四十一段の階段がつながっていた。さらに階段の幅が狭い。王禅寺村の鎮守五社の一つとされていたこの神社の階段を今までに、何人の人が上ったのだろう。草履や裸足で祈りを捧げに来たその姿が、目に浮かんだ。息を弾ませながら、一気に上り詰め、後ろを振り返ると、鳥居が遠くに見えて、空が近くなった。静かな風が吹いた。気持ちが良い。

社殿のほかは何もないが、安らかなひとときがあった。帰りは、坂道に階段がついていて、三十六段下るともとの場所に戻る。看板があり、この神社は、虫歯を治す神様として信仰されていると書いてあった。ありがたい。

（原画の技法「ウッドバーニング」）

# 麻生区文化協会とともに

副会長 伊藤胡桃

私は一九八三年に麻生区に住み始め、文化協会の会員になったのが設立一年後の頃でした。文化祭は第二回目からの参加です。教室を開いて間もない私たちの発表は先輩方の中でまさに「ひよっこ」のようで、肩を並べられるようになるのはいつのことかしら、と思っただけです。

私から二十五年目を迎え、確かな道のりを継続して活動を続けられている事は、文化協会の支え

があってこそと有り難く感じています。当時を振り返るとき、藤田親昌先生や水上馨先生、また洋舞での仲間であいらした代谷隆枝先生方のお人柄が懐かしく思い出されます。

音楽家の両親をはじめ、親戚も芸術家という環境の中で育った私は、文化協会の活動により、定義付ける事の出来ない「文化」についてその多様性を知る機会を与えていただきました。歴史あるもの、新しいもの、人々の生活のなかに育まれる素晴らしい文化等、人が目指すものにひたむきに邁進する姿や、誰も気づかないような所にも光る文化が想像されま



第9回胡桃（くるみ）バレエスタジオ20周年発表会「白鳥の湖」より（2004）

すが。私がそれぞれのおかれた場所と感覚を磨き、より向上を目指すことが文化を育むことにつながるのではないだろうか。また、それは個人のアイデンティティーを貫くことにも等しく、沢山の人のよる努力の結集に文化が育まれてゆくのではないかと、六十半ばの私の頭の中でさまざまな思いが廻りまわす。美味しいものに共通の旨みがあるように、研鑽を重ね、洗練された文化にジャンルを超えた共通の香りを感じます。

私の持つ小さな創造空間も協会と同じく二十五年を経て、その間にバレリーナの誕生（バレエを仕事とする）は僅か数名ですが、バレエとともに育ったことも私たちは数え切れません。あさお洋舞ぐるーぷの刺激し合いながらの共生も素晴らしく、学び合える場です。生徒たちにとって、「かわさき市民芸術祭」や「麻生区文化祭」でのステージは、それぞれの大切な思い出になっていることでしょう。

ダンサーになった次男も小学校で麻生の舞台を踏んだ一人です。指導者の立場から生徒一人の成長にかかわる時間の長さ（二十年以上）の責任は軽くありません。指導者自身の生きる姿勢・人間性がいつも問われています。

「今一流でなくても、目指す所は高く」というのが教室の変わらないコンセプトです。舞台は華やかに見えますが、それ以外はとて地味な毎日の積み重ねです。バレエを学びながら個々の価値観、感覚を磨き自分を構築する糧にしてもらえたらと願いつつ、その成果が少しでも形になった時は幸せに胸が膨らみます。理想や情熱をなくして輝くことは出来ないでしょう。人と人のつながりから多くのことを学びながら、私の生きる表現であるバレエという媒体をもって日々模索は続きます。

文化協会への入会でスタートし、文化協会のバックアップを得て歩んでこられた現在に感謝し、これからも微力ながら役に立てることを願い、時には変革も求めながら、積み重ねを大事に着実な文化活動の発展を目指していきたいと思えます。

# 草の根タウン紙『華沙里通信』

ギャラリー華沙里 井上 美佐子

お客さまが運ぶ「文化の香り」

昭和五十二年、地元出身の私は現在の画廊とは別棟の一階で「喫茶・軽食 華沙里」の営業を始めました。開発・造成中の土地の中に新百合ヶ丘駅がポツンとあるだけで、最初はここで商売になるの心配でした。しかし、そんな心配をよそに周囲の開発が進むにつれて客足は伸び、店内には自然に人の交流の輪ができるようになりました。お客さまの年齢も職業も多種多様で、華沙里はその方たちで育てていただきましたし、その中で、私自身の気持ちにもなにかが動き始めていたようです。



「通信」のファイルを手(ギャラリーで)

「劇場喫茶」と「華沙里通信」

開業して七年目に、常連のお客さま方の意見もあつて、催し物ができるように中央に半円形のステージを設けるなどの改装を施しました。その「柿落とし」ではNHK有志のご協力を得て、俳優座の岩崎加根子さん演ずる「一人舞台」チェーホフの「桜の園」を上演したのですが、用意した六十の客席が二ステージとも満席になるという盛況ぶりでした。大成功です。

その後、「喫茶店劇場」「舞台付喫茶・パブ」などと新聞にも取り上げられて、その目新しさが一時話題になったりもしました。

初めは、音楽・芸能関係の方々「演し物」をお願いするなどして手探りで始めた「劇場喫茶」でしたが、按ずるより生むが易しで、割と順調にその形を整えていたように思います。

新装オープンを機に、華沙里を訪れる方々の知識や体験などを気軽に披露いただけたらと、昭和

五十九年七月一日に月刊「華沙里通信」を発刊しました。地元出身の私は、この仕事を始めたときに、昔から住んでいる人たちと新しい住民の皆さんとの間の架け橋になるようななかをと、いつも考えていましたから、華沙里劇場の案内も兼ねたこのタウン紙の創刊には心が弾んだのを覚えています。

創刊号の冒頭には、岩崎加根子さんの「一人舞台」上演の記事を掲載しました。以来、記事の内容も地元の文化活動の紹介・連載物・インタビュー記事と幅を広げて通算八十六号まで続きました。

「ギャラリー華沙里」と「麻生ふれあい通信」

平成元年に乳癌を患い、「喫茶・軽食 華沙里」を閉店しましたが、「通信」だけは歩みを止めず続けました。編集の役目は、常連で産経新聞の恩田幸夫さんでした。

私は、二年間の療養中にヨーロッパ各国の美術館を訪れ、数々の名画や美術品を観て廻りました。

もともと美術に関心があったからですが、その体験を活かして、地域の方々に身近な場所である作品と接することで、芸術への関心を深めて欲しいという思いで

平成三年九月に別棟の新ビル二階に「画廊・喫茶 華沙里」をスタートさせたのです。画廊をオープンしてから「通信」のスタイルにも変化が生まれました。八十七号から恩田さんが定年退職後に設立された「ふれあい通信社」が季刊発行する「麻生ふれあい通信」(タブロイド版)に引き継がれたのです。

通算して十一年順調に発行された通信でしたが、無念にも恩田さんの急逝で、平成七年六月発行の一〇二号を最後に終了しました。

ご執筆・ご登場された方々の中には麻生区文化協会の方も少なくありません。なかでも、亡くなられた藤田親昌先生には、良き理解者として接していただきました。

人と人との出会いが縁となり、身近なところで文化を考え語り合いたいという、私の草の根的な発想が「通信」という手段

で、少しは達成できたようだと、振り返ってみて、今はそう思っています。



ゆりがおか児童合唱団を育てた

# 山田榮子先生のこと

ゆりがおか児童合唱団  
OG・父母の会 現・元会員 編



為に披露されたお玉手習い中  
に開眼したお玉手習い中

■麻生区のイメージソング「かがやいて麻生」を耳にされたことはおありですか。斉唱版を歌っているのは、山田榮子先生主宰・指揮のゆりがおか児童合唱団です。

先生は疎開がきっかけで、ひばり児童合唱団の創立時のメンバーになられ、小・中学校時代はNHK学校放送や幼児の時間等に出演。お茶の水女子大を卒業後、中学・高校の音楽教師を経験されました。

■「どうしても児童合唱がやりたい。親子で合唱が出来たら素晴らしいと思わない？」と、目を輝かせて言われました。先生は百合ヶ丘団地に生まれ、八歳と三歳の二児の母、一九七〇年、大阪万博の

年でした。指導されていた「百合ヶ丘コーラス」のママさん団員を中心にピラ貼りをして集まった小学二年から六年まで二十数名、「ゆりがおか児童合唱団」の誕生です。常任・練習ピアノニストは当時六年生の西山淳子先生でした。

百合ヶ丘団地の集会所から歌声が聞こえ始め、団員の面倒を見る人、先生のお子さんを預かる人と、様々な形で支え合い、小さな集団は大きな家族のようで、やがて団を支える父母の会となりました。

■先生の理想は、「子どもを管理せず、まとまらないかもしれないけれど、責任を自覚して出欠をとらなくても集まる合唱団。体を通った声で、声そのものに心のあるような、作りものでない、子どもらしい音楽」でした。迷い悩みながらも曲選びと声作りの模索は続けられ、堪り兼ねた時には「しようがない。好きで自分が始めたことだから」とご自身で整理をつけ

ては元気を取り戻されていました。

■先生は「ヨーロッパの合唱曲」を子ども達に伝えることに情熱をかけておられました。グレゴリオ聖歌から現代までの幅広い時代、様々な作曲家の素晴らしい曲の数々。これらを入団テストも無い合唱団の「普通のニッポンの子ども達」が原語で歌うのです。譜読みに始まり、外国語の読み方・発音、歌詞によっては専門の先生にも教えて頂いたり、宗教曲は背景にある信仰について絵を見せて説明して下さったりしました。先生の情熱は「子ども達をいつかヨーロッパの教会で歌わせたい」という夢となり、創立二十五周年記念「ハンガリー・ウィーン合唱交流の旅」として実現しました。

■日本の曲の大切さも強く感じておられ、唱歌から現代の曲まで、多種多様な作品に挑戦されました。普段当たり前のように使っ

ている「日本語」を正しく美しく発音し、詩の心を伝えることに苦心されました。団の節目には、子ども達のために現代作曲家の林光、高橋悠治氏等に委嘱し、初演した作品は九つを数えます。

■「私は人の三倍練習しないと出来るようにならない」と、主婦業の合間に練習時間を捻出し、お台所で包丁を持っている時に、気づくと腕が指揮の格好になっていたそうです。「学ぶ側」が出来ない時、その責任は「教える側」にあると、ご自身もグレゴリオ聖歌や指揮の勉強を続けておられました。

■一九七八年六月、神奈川県合唱祭で百合ヶ丘コーラスと共演。曲は先生の生年一九三五年に作曲されたコダーイの「アヴェマリア」。この時の演奏が翌年、NHK「みんなの歌」で「夏は来ぬ」を録音することにつながりました。「親子で合唱を」という先生の初志が、「ヨーロッパの合唱曲」の演奏で実った嬉しい出来事でした。

■先生は、百合ヶ丘団地に十年住まれ、その後、ご主人のご両親と

同居されるため練馬に移られました。ご主人が多勢の部下を連れて帰られた時には、夜遅くからでもおもてなしをされたそうです。ご家族が入院中で徹夜の看病をしながらでも、毎週二度、片道一時間半をかけて合唱団に通われました。

■新百合ヶ丘に麻生文化センターが出来、第十回定期演奏会からは地元での開催となりました。千人のホールは広すぎるのですが、「地域の方々に大勢聴いて頂き、合唱団の輪を広げたい」という先生のご決断でした。

この年から現代舞踊の石井かほる先生に演出・振付をお願いし、歌と踊りの「シアターピース」が始まりました。衣装のタメ出し連続にじっとしていられない山田先生と問屋街へ日参し、お互いのタフさを「エイリアン」とほめ合った暑い夏の日を思い出します。

■児童合唱団というのは外部とのお付き合いの中で、「どうせ子どもだから」という扱いを受けることがあります。どんな不愉快な思いをされても「引き受けたからには誠実に努めることが礼儀、良い

演奏をして認めて頂ければ次の機会につながり、子ども達はより多くの宝物体験が出来る」と、常に誠実に取り組まれました。実際、団はその通りに活動の場を広げていき、国内外の合唱団や、オーケストラとの共演、オペラ、CM録音等、様々な機会を頂くようになりました。団員はいつも先生の強さ・優しさに守られていました。

■昨夏、団員がついに三十人を切り、いつもは前向きな先生もさすがに落ち込まれました。そんな時、サントリーホールでのマラー作曲〈交響曲 第三番〉の話が入り、「神様がご褒美を下さったわ」と、それはそれは嬉しそうでした。その後も大きな依頼が入り、先生に笑顔と明るい声に戻った矢先、西丹沢で遭難されたのです。突然のことに驚き、途方にくれました。

しかし先生は「人と人とのつながり」という財産を残して下さい、天国から、四十年分の団員と合唱団に関わった人々それぞれに語りかけて下さっています。今、合唱団は卒団生の藤井大輔、河合由里、ピアノの西山淳子先生、和田良枝先生の四人をリーダーに、山

田先生が「神様からのご褒美」と喜ばれたステージと、既に構想を練っていらした創立四十周年記念定期演奏会（八月二十九日・麻生文化センター）の練習に励んでいます。

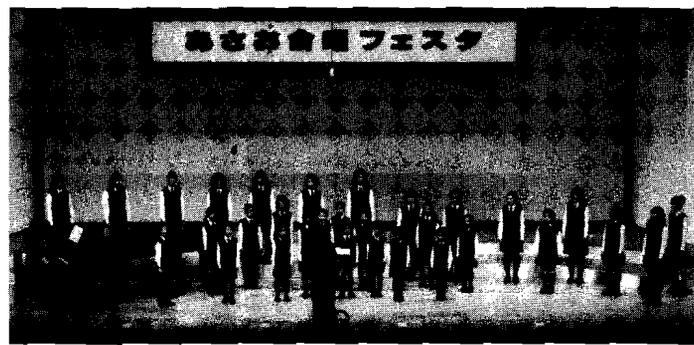
■地域からの応援として、今は亡き麻生区文化協会初代会長、藤田親昌氏が創立二十周年のお祝いに贈って下さった言葉です。

「子ども達がすくすくと育っていく姿は美しいものです。それは一種の芸術的な見事さといってもいいでしょう。そうした成長に関わる親の姿もまた美しいものです。

私は、言われている受験競争、行きすぎた学歴社会意識など緩和しようとする気持があれば出来る筈であると信じています。その一つの方法として、子どもの成長を支えるために、音楽なり、絵画なり、いろいろな学びが子どもにとって必要であると信じております。それは長い人生に、いつかはつきりと影響が現れてくるものです。私達は出来るだけ知恵を働かせて可能な道を選んで歩むべきだと考えております。」

これは、まさに先生のお心その

もの。心に留めたいと思います。



第13回あさお合唱フェスタ 麻生市民館大ホールで (2008・10)

ゆりがおか児童合唱団  
地域での活動の他、二〇〇〇年「国際市民ネットワーク」の音楽親善使節として旧ユーゴスラビア・クロアチア訪問、第三回多摩地域文化賞、東京ヴォーカルアンサンブルコンテストジュニア部門金賞・東京都教育委員会賞（五年連続）、第九回花とライオン児童合唱音楽賞など。

文責・金山郁子



平成二十一年度

# 第二十二回 麻生区俳句大会

十月三十一日  
実行委員長

白井 爽風

川崎市市長賞

忘却の日々を広げて虫干す

相模原市 森 一枝

川崎市議会議長賞

赤とんぼ群れて夕日を濃くしたり

麻生区 池内 英夫

川崎市教育委員会賞

みちのくの山河変はらず稲の花

麻生区 近藤まさ子

川崎市麻生区区长賞

着ぶくれて達磨の中の達磨売り

港区 彦坂 秀窗

川崎市麻生市民館館長賞

余生なお生ある限り稲を刈る

麻生区 吉澤 算村

川崎市総合文化団体連絡会理事長賞

やがて我還る大地に種を蒔く

麻生区 有我 行子

川崎市俳句連盟会長賞

捻花の真直ぐ伸びて反抗期

高津区 羽根田 明

川崎市観光協会連合会会長賞

忍び寄る過疎化の愁ひ蕎麦の花

麻生区 鈴木 翠明

麻生観光協会会長賞

コスモスや駅に別れの手話つづく

麻生区 本玉 秀夫

麻生区文化協会会長賞

小春日の水車ゆるりと日を返す

麻生区 鷺澤 一夫

第二十二回 俳句大会当日優秀句

席題 当季雑詠 読み込一句「友」か「指」  
足し算の子に指を貸す秋うらら

久保倉和美

水澄むや十指で掬う空の青

近藤 久生

秋祭り指が鶏生む船細工

彦坂 秀窗

この指をはなせば別れ秋の暮

白井 爽風

指切りは何時も夕暮木の実降る

藤原 三紀

指揮者無き里の名演虫時雨

市川 草人

健やかに十指ありけり栗を剥く

山路 紀子

指先の綺麗に揃ふ風の盆

金成 伸子

友禪の絵柄を描く筆は秋

藤田 皓

老いてなお柿むく母や指確か

笠原 秋水

平成二十一年度

# 俳句講座点描

山室 樹声

第一回 八月二十五日  
第二回 九月 一日  
第三回 九月 十日

第一回の講師は俳句とは異った分野の多趣味がご自慢の草鹿庸次郎先生、得意のパソコンを駆使して「心のままに生きる」と題した写真入りの楽しい三十頁にも及ぶ小冊子を資料として全員に配られそれに基づいて北海道に生まれ育ってから現在に至るまでの成長について自在に話を進められた。人間とコンピュータの違について、人間は心に従い、コンピュータは言葉に従うと面白い説明があった。草鹿氏の心のままに、前向きに生きる姿勢に作句上のヒントを頂いた一日であった。

第二回の講師は、俳人協会理事の太田士男氏、氏は「自然と俳句」と題して講演された。氏は日本の自然の特徴から話を進められ、俳句で大切な事は自然を詠むことである。特に身近な自然として里山の果してきた役割の重要さに触れられ、その自然の写生を通して人間の営みを詠むことが大切であると結ばれた。

国原や野火の走り火よもすがら 水原秋桜子  
近江野に青ばつちりと青花摘 大野林火  
片栗の花に離れて牛繁く 太田士男

そのためには季節感に敏感であることが特に大切であろう。また自然には威厳、厳しき、優しい、一途さ、神の気配等も感じられ、それらに焦点を当てて作句する姿勢も大切である。

雪解川ぐんぐん山を引張り 太田士男  
第三回の講師は地元麻生区の俳句、連句誌「八千草」主宰の山元志津香氏、演題は「今をたのしく詩う十七音」であった。

氏は「万象をやさしく見詰め個性豊かに現代を詩い合いましよう」と提案され、「古典を識ることも大切ですが、芭蕉、蕪村、一茶、子規、虚子には詠めない現代を発見し冒険することが俳句の楽しい面白さにつながる」と続けられた。正に志津香氏の俳句論で大いに啓発させられた。

きぬかつぎ弾き出されし冥王星 志津香  
後半は参加者全員が提出した俳句への明解にして適切な寸評に納得、満足して家路についた。

独特の写実を追求した異色の画家

## 海老原富夫さんの遺作展

昨年四月に悪性リンパ腫のため七十七歳でお亡くなりになった元会員で麻生区美術家協会前代表代行の洋画家海老原富夫さんの遺作展が、二〇〇九年十一月十九日から十二月八日まで、ギャラリー華沙里において開催されました。油彩、水彩、ドローイングなど、大中小合わせて四十三点が所狭しと展示され、期間中二百名を超える多数の參觀者がありました。

静物や麻生の風景が丁寧な筆致で描かれ、独特のマチエールは、見るものに彼の並々ならぬ作品へのこだわりを訴えかけ、感動を与えました。三月初めには銀座でも遺作展が開催されました。

海老原さんは、日本美術会に所属され、一九八六年アンデパンタンの実行委員長、一九八七年、八九年日本美術会事務局長を務め同会のリーダーとして活躍されました。

一九八五年、麻生区美術家協会の設立に関わるとともに長く事務局長として会をまとめてこられました。わが文化協会のデッサン会

に美術家協会が協力する礎を築いた功績も大きいと思います。謹んでご冥福を祈ります。

(佐藤勝昭)



遺作となった「百合丘風景」



遺作展オープニングパーティ風景

## 第七回 あさお古風七草粥の会 大盛況に、うれしい悲鳴！

正月のあさおの風物詩となつていく七草粥の会が、冬晴れのもと、一月七日に開催された。

「あさお古風七草粥の会」は、もと文化協会の「古風七草粥を食べる会」として、細山郷土資料館でアカデミー部の「新年懇親会」に端を発し、協会主催として定着した。その後、「区民のための七草粥」の実現を目指し、当時の杉本会長が中心になり区に働きかけた。平成十六年一月七日、区政推進事業の一つとして「第一回あさお古風七草粥の会」が区役所広場で開催され今日に至っている。

当初は三百食を提供していたが、今回は八百三十食を準備した。一時の受付なのに十時にはすでに長蛇の列ができ、道路まではみ出すほどの人気。スタッフが会場整理に奔走する事態になり、嬉しい悲鳴であった。七草粥は一時間半足らずで品切れとなった。

当初は一食百円を頂いていたが、第五回からは無料にした。しかし、「タダ食いはしたくない」などの来場者の声を受けて、第六回より募

金箱を置くことにした。区役所の庭の一角に七草畑を設けているが、その管理を地元の障害者支援施設にお願いして募金を活かしている。



冬晴れのもと、勇ましく行われた揮毫

正月遊びもあり、「童謡をうたう会」による歌やお囃子保存会の獅子舞も披露された。書家の笠原秋水氏の揮毫も行われ、小学生も挑戦するなど、正月ムードいっぱい。会場は大賑わいだつた。

「こんなに大きな書き初めは、暮れの清水寺の文字かと思っていた」「書き初めを子どもに見せられてよかった」と区民の声。

室内ではコンサート、「川崎カルタ」取りが同時に開催され、日本の伝統文化の伝承も伝えるあさおの一大イベントとなった。

(橋本周)

### 会員の活躍 ◆ 出版特集 ◆

※「理科力をきたえるQ&A」

佐藤勝昭 著

「鉄はどうして磁石につくの?」  
「どうして? なぜ?」を連発する子どもたちに、お父さん、お母さんがきちんと答えられるための基礎知識。勿論大人の疑問にも答えてくれる。科学者であり画家でもある著者の解りやすい説明と自筆のイラストが魅力。

(二〇〇九年十二月発行・ソフトバンククリエイティブ)

※歌集「冬銀河」

箕輪敏行 著

「天狼と名付けし南天のシリウスが爛々として今宵輝く」  
アマチュア天文家としては広く知られている著者。短歌、漢詩の経歴も長く、出版もかさねているが、九十歳を迎えてから出版された最新の短歌と漢詩の歌集。

(二〇〇九年十月発行・短歌新聞社)

※句集「遠富士」

藤田風樹(皓) 著

「薄墨の名よりも淡き落下かな」  
現役時代からの長い句歴を持つ

著者が傘寿を迎えるにあたり編輯した。こよなく愛する富士を、国内、海外の旅の句に。研究熱心で几帳面な著者の人柄がうかがえる。

(二〇〇九年十月発行・角川書店)

※句集「朴の木山房」

山室樹声(茂樹) 著

「天に星地に流水の露天風呂」  
難しいことばは使わず、わかりやすいをモットーの作句。ここ十五年ほどの人生の証の一端である。と著者の言葉。こだわりのない、温かみのある、幅広い人生がうかがわれる。

(二〇〇八年十一月発行・文學の森)

※「松風庵玉歩句集」

松風庵玉歩(田宮正一) 著

「石積みて霧の月山背に下る」  
人情家で涙もろく、温かみの中に淋しさがちらつく。庭師でもあり、当協会の七草粥の行事に協力を惜しまなかった著者。残念なことに昨年十二月に急逝された。

(二〇〇八年十二月発行・文學の森)

(関森田鶴子)

※「麻生郷土歴史年表」

小島一也 著

市議会議長の重責を終えられた小島一也さんは、柿の実学園理事長・麻生観光協会会長等の多忙な職務の中で、長年の緻密な研究調査の記録を年表という形をとって纏められた。この研鑽と努力を支えたものは、小島さんの郷土愛にほかならない。生まれ育ったこの土地を誰よりも愛し慈しんだ小島一也さんにして初めてできた出版の重要事項と対比しながら列記している。そして郷土の範囲を、麻生を中心としながら川崎市域・旧都築郡・旧南多摩郡にまで広げ、その変遷を関連付けて捉えることができるよう工夫している。

この年表の特徴は、コラム欄の記述にもある。各時代の特記事項を二ページごとに四百字程度に纏め、巻末コラムの三十八ページと合わせると、その内容の深さに敬意を表すものである。全三百五十三ページ。これから麻生の研究を進める者にとって大切な道しるべになる「年表」であると信じる。

(二〇〇九年十二月発行)  
(千坂隆男)

### 編集後記

▼麻生区文化協会は創立二十五周年を迎え、三月一日、記念式典が開催された▼新百合21ホールでは記念祝賀会と同時に「アルテリツカ新ゆり美術展」のオープニングも行われ、美術展も盛況のうちに幕を閉じた▼二十二年度の三月には「からむし」がいよいよ五十号の発行となる▼年に二回の発行とはいえ、毎号地道に記事を重ねてきた、それぞれのシリーズをまとめるだけでも一冊の本になりそうだ。

(松田記)

松田洋子・関森田鶴子・千坂隆男  
橋本周・佐藤勝昭

麻生区文化協会会報

からむし 第四十八号

平成二十二年三月三十一日発行

発行人 麻生区文化協会

会長 菅原敬子

編集 麻生区文化協会

広報部

川崎市麻生区万福寺一―五―二

麻生文化センター内

☎ 〇四四―九五―一三〇〇

印刷 マイタウン21